The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代熊本市方言の準体助詞 ： 「ツ」と「ト」の違いについて
Author(s)	坂井, 美日
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2012, 10, p. 30-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23202
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 10 号（2012 年 3 月）30-47

現代熊本市方言の準体助詞

―「ツ」と「ト」の違いについて―

坂井　美日[1)]

【キーワード】熊本方言，準体句，準体助詞，形状性と作用性，名詞性

【要旨】

熊本市方言は，準体助詞として「ツ」と「ト」という二つの形式を持つ。本論では，この「ツ」と「ト」の違いを，形態音韻面，意味面，統語面から検討し，次のことを述べる。

形態音韻面

・直前の用言が動詞連体形の場合，「ツ」は用いられない。

・直前がタ形・形容詞の場合は「ツ」「ト」両者が現れうる。

意味面

・「ツ」と「ト」が両方現れうる，すなわち二者が対立しうる環境においては，「ツ」と「ト」では意味解釈に違いが生じる。この際，「ツ」を用いた準体句は形状性（モノ・ヒト），「ト」を用いた準体句は作用性（コトガラ）の解釈となる。

・しかし，機能語である「ツ」と「ト」自体に意味があるわけではない。

統語面

・「ツ」と「ト」では，統語的には「ツ」の方が名詞と似た振舞をする。

・一方「ト」は，名詞に置きかえられないコピュラや終助詞（「～ノダ」「～ノカ」）等にも用いることができ，より機能的に振舞う。

・「ツ」＝《モノ・ヒト》と「ト」＝《コトガラ》という分布は，名詞性（指示性）の違いで捉えられる。このことで，コピュラや終助詞等における「ツ」と「ト」の違いも説明できる。

1.　はじめに

準体句とは，例えば次のようなものである。まずは現代標準語で示す。

（1）現代標準語

a. 一週間かけて作った$\boxed{の}$を壊してしまった。

b. 昨日雷が鳴った$\boxed{の}$を知らないのか。

（1）a の下線部は‘一週間かけて作ったもの’を，（1）b の下線部は‘昨日雷が鳴ったこと’を指し示しており，「の」を伴った句節は，物体や事柄を指し示すという体言相当の機能を帯びている。また，これら「の」を伴った句節は，統語的にみても，格を直後に伴って主文述語の項となるなど，体言相当に振舞っている。

本論では，上例のように体言でない句節を体言相当に振舞わせる操作を「体言化」とよび，（1）ab の下線部のように，体言相当に振舞う句節のことを総称して「準体句」とよぶ。

1）　坂井美日：熊本県熊本市出身 0-18，奈良県 18-22，大阪府 22-25（現在）

そして，「の」のように，句節を体言化するために付す助詞を「準体助詞」とよぶ。

現代標準語は準体助詞として「の」という一つの形式しか持たないが，現代熊本市方言は準体助詞として，「ツ」と「ト」という二つの形式を持つ。

（2）熊本市方言（a,b は（1）の例文に対応）

a. 一週間かけて作ったツば壊してしもうた。

b. 昨日雷ん鳴ったトば知らんとか。

現代日本語において，一つの方言内で二つの準体助詞を用いるという現象は希少である（2 節注 2 参照）。

本論では，この熊本市方言の二つの準体助詞，「ツ」と「ト」の関係性を中心に記述を進める。構成としては，2 節にて先行研究の整理を行ない，3 節にて形態音韻面の記述，4 節にて意味面の記述，5 節にて統語面の記述を行なう。

2.　先行研究

「ツ」と「ト」に言及したものとしては，大野（1983）と，吉村氏・仁科氏の一連の研究がある。大野氏も，吉村氏・仁科氏も，ともに「ツ」と「ト」は相補分布の関係にあると述べるのであるが，その分布の要因については見解が異なっており，前者は音韻的要因（2.1），後者は意味的要因（2.2）を挙げる。

しかし熊本市方言においては，それぞれの説に対して反例があり（2.1.2，2.2.2），より詳細な分析が必要と思われる。

2.1.　大野（1983）

2.1.1.　音韻的分布

大野（1983）では，福岡県浮羽郡田主丸町・同八女郡黒木町，同筑紫野市山家・同山門郡瀬高町・大分県玖珠郡九重町など，大野氏が調査した当時において[2)]，準体助詞に「ツ」と「ト」の両形が見られた方言の観察とその分析が示されている。そこでは「ツ」と「ト」について「音環境の上で相補分布を示していると考えることができる」と述べられる。

（3）大野（1983:59）

結論から言うと，現在までの調査の限りでは同一形式の異形態と考えている。「ツ」と「ト」の現れる音環境をみると，前接語が〔a〕〔e〕[3)]〔i〕音で終わる

2）　2012 年現在において筆者が知るところでは，福岡，佐賀，長崎，鹿児島，大分，そして甑島（鹿児島県）などの離島も含め，九州のほとんどの地域では準体助詞で二形式を使い分けることはなく，一形式のみを用いる（準体助詞の形式は，大分市は「ノ」であるが，大分西部を含め九州大部分の地域では「ト」を用いる。なお，宮崎は未だ調査をしていない）。

また，熊本市方言においても，若年層の話者は「ツ」を用いず，「ト」の一形式のみを用いる。

3）　亀甲括弧〔 〕について

〔 〕は，大野氏の表記をそのまま引用した。しかし筆者は，音素の問題として扱い，本文中では/ /による音韻表記を用いる。

・/e/を含むことについて

大野氏は/e/に準体助詞が続く例として「キタネェー（汚いの意）」等の用例を含んでいるが，標準語「ない」にあたる熊本市方言は，「ナカ」（例：汚ナカ）または，「ニャア」（汚

時には「ツ」，〔u〕音で終わる時には「ト」，〔o〕[4] で終わる時には「ツ」「ト」の両形が現れる傾向を示し，音環境の上で相補分布を示していると考えることができるからである。

また，大野氏はこの音韻的分布の要因として，九州方言によく見られるという「弱母音化傾向」((5)（6)）を挙げ，「ト」の弱母音化して生じた異形態が「ツ」であると分析する（(4)）。

（4）同上 p.59
九州方言，特に熊本県下にみられる弱母音化傾向などを考慮に入れると，「ツ」が「ト」の異形態と考えることができるのではないかと思う。

（5）（弱母音化に関する大野氏の注）同上 p.66
広母音・中開母音を含む音節の母音が〔ɯ〕〔ɨ〕になる現象。『方言学講座四』などによれば，九州方言にみられる準体助詞「ト」「ツ」「チ」に関しては，「ト」が本来の形式で，地域により「ツ」「チ」と音声変化すると考えられているようである。

（6）秋山（1961:218-219）
〔弱母音化傾向〕。（中略）広母音・中開母音を含む音節の母音が狭母音ɯ̞・ɨ になる現象は県下共通の強固な習慣である（中略）準体体助詞「と」も[orgatsu]私のもの，[jokatsu]善いの，となる。

2.1.2.　反例

大野氏は，/a/（/e/ ,/i/）に後接する場合は「ツ」が現れ，/u/に後接する場合は「ト」が現れると述べる。しかし現代熊本市方言では，/a/等に後接する環境下で，「ト」の方が積極的に選択される場合がある（(7)（8)）。

（7）［幽霊が消えたのを見た。］
幽霊ん消えた｛ト／*[5] ツ｝ば見た。

（8）［眼が疲れているので部屋が明るいのがつらい。］
眼の疲れとるけん，部屋ん明るか｛ト／*ツ｝がつらか。

2.2.　吉村（2001;2006），吉村・仁科（2004），仁科・吉村（2005）

2.2.1.　意味的分布

ニャア）となり，末尾音素は/a/となる。よって本論では/e/に準体助詞が続く場合を扱わない。

4）　/o/について
大野氏は/o/に準体助詞が続く例として，継続相「トル」の異形態「トー」に続く例を挙げるが，現代熊本市方言は「トー」という異形態を持たないため，本論では/o/を扱わない。

5）　例文に付す記号について
＊：非文（文法的に許容されない）
＃：不適切（運用的に許容されない）
?：やや不自然（適格性が低い）
??：不自然（適格性が極めて低い）

吉村氏・仁科氏は，熊本県八代市方言[6] をもとに，準体助詞「ツ」と「ト」は意味的に相補分布すると述べる。

（9）吉村・仁科（2004:66）

熊本八代方言では「つ」と「と」が用いられる。この内，「つ」は「ひと」・「もの」に，一方「と」は「こと」にそれぞれ対応する形で使用される。

2.2.2.　反例

吉村氏・仁科氏は，「ツ」は「ひと」「もの」に，「ト」は「こと」に対応すると述べる。しかし現代熊本市方言では，「～のもの」の意で「ツ」と「ト」の両方が用いられることもあれば（(10)），物を指しあらわす文脈であっても，物に対応するとされる「ツ」が用いられず，「ト」しか用いられない場合もある（(11)）[7]。

（10）［それは花子の（物）だよ。］

それは花子ん｛ト／ツ｝ばい。

（11）［そこにあるの（=物）を取って。］

そけある｛ト／*ツ｝ば取って。

2.3.　問題点の整理

現代熊本市方言においては，音韻的相補分布の説でも，意味的相補分布の説でも，「ツ」と「ト」の振舞を説明しきれない部分があり，分布の様相が複雑なようである。

本論では，現代熊本市方言の「ツ」と「ト」について詳細に記述することを目的とし，形態音韻面，意味面，また，統語面からの観察を提示する。

2.4.　本論の典拠

本論は，熊本市出身である筆者の内省に基づく。また，確認作業として筆者の家族や友人（全員熊本市出身）におこなった補足調査（2010~2011）も反映している。

3.　形態音韻面

本節では，熊本市方言の「ツ」と「ト」を形態音韻面から整理し，「ツ」と「ト」の分布が次のようにまとめられることを述べる。

① 動詞の連体形（-(r)u）に後接する場合，「ツ」は現れず「ト」しか用いられない（3.1）。

② タ形（-ta）または形容詞（-ka）に後接する場合，「ト」も「ツ」も出現する（3.2）。

6）　吉村・仁科　（2004:62）

「ここで取り上げるのは，熊本県の南部に位置する八代地方，より厳密には，八代郡の南部地域（宮原町・鏡町・竜北町）において話される方言である。」

7）八代市の 60 代女性にも確認調査したところ（調査年：2010，2011），やはり熊本市方言と同様，（11）には「ト」を用いており，これを「そけあるツば取って／そけあっツば取って」のように「ツ」を用いると，不自然になるという回答が得られた。

3.1.　動詞の連体形に後接する場合

3.1.1.　記述

動詞の連体形に後接する場合，「ツ」は現れず「ト」しか用いられない。

（12）［そこに書いてあるのを読んで。］

そけ書いてある｛ト／*ツ｝ば読んでくれんね。

（13）［何か書くのを貸して。］

何か書く｛ト／*ツ｝ば貸してくれんね。

この使い分けは，連体形末が促音異形態になる場合においても同様である。すなわち「ある→あっ」のように，連体形末が促音になる場合においても，「ツ」は現れず「ト」しか用いられない。

（12）’［そこに書いてあるのを読んで。］

そけ書いてあっ｛ト／*ツ｝ば読んでくれんね。

これらの環境において「ツ」が用いられないというルールは強く，準体句が「モノ」「ヒト」「コトガラ」のいずれの意味であっても，「ツ」は用いられない。

（14）［そこにあるのを取って。］《モノ》の意

そけある／あっ｛ト／*ツ｝とば取って。

（15）［外にいるのを呼んで来て。］《ヒト》の意

外におる／おっ｛ト／*ツ｝ば呼んで来てくれんね。

（16）［虫を見るのを嫌がる。］《コトガラ》の意

虫ば見る／見っ｛ト／*ツ｝ば嫌がらす。

3.1.2.　考察

連体形接辞が-(r)u であることから，3.1.1 の現象は，準体助詞が/u/に続く際におこる音韻的現象と見ることもできる。このようにみれば一見，本論の観察結果は大野氏の「〔u〕音で終わる時には「ト」」になるという分析と重なるように思われる。しかし(12)’に指摘したように，この現象は末尾が/u/の場合だけでなく，連体形接辞の促音異形態の場合でも同様にみられることに注意が必要と思われる。促音異形態でも同じ現象がみられること考慮すると，ここの「ツ」／「ト」の分布は，前に来る音素との関係による音韻的な現象とみるよりは，動詞連体形による形態統語的要因とみた方が穏当のように思われる。

また補足として，準体助詞以外の/cu/は/u/に続くことができる（（17）（18））。このことからも，/u/の後ろは「ト」になる，という音韻ルールを立てるには疑問が残り，3.1.1 にみた準体助詞「ツ」「ト」の分布は，音韻的要因ではなく形態統語的要因と考えられる。

（17）うつぼ　/ucubo/

（18）（注：カサブタのことを，熊本方言では「つ」という。）

［治りつつあるカサブタ（＝「つ」）を剥がしてはいけないよ］

治りよるつば剥がしたらいかんよ。

/naorijoru cu/

3.2.　タ形と形容詞に後接する場合

3.2.1.　記述

タ形または形容詞に後接する場合，「ト」だけでなく「ツ」も出現する。

ただし，この環境においては，「ト」と「ツ」の使い分けが発生するようである。使い分けについては，4 節にて詳述する。ここでは，「ト」と「ツ」が，ともにタ形と形容詞に後接する環境で用いられることを示す。

タ形に後接

（19）「ト」の例（再掲）［幽霊が消えたのを見た。］
幽霊ん消えた｛ト／*ツ｝ば見た。

（20）「ツ」の例［魚の焼いたのを食べた。］
魚ん焼いた｛??[8] ト／ツ｝ば喰うた。

形容詞に後接

（21）形容詞→ト［遅いのが悪いんだよ。］
遅か｛ト／*ツ｝が悪かったい。

（22）形容詞→ツ［大きいのを取って。］
大きか｛?? ト／ツ｝ば取って。

当方言の形容詞連体形接辞は-ka である（以下，カ形容詞とよぶ）。若年層の場合，形容詞を/i/で終わる標準語形に切り替えることもあるが，切り替えた場合でも「ツ」と「ト」の使い分けはカ形容詞と同じである。少なくともここに音韻的要因は影響しないようである。

（19）’［お前が遅いのが悪いんだよ。］
お前ん遅い｛ト／*ツ｝が悪かったい。

（20）’［大きいのを取って。］
大きい｛?? ト／ツ｝ば取って。

3.2.2.　考察

大野氏の記述では，/a/に後接する場合は「ツ」が用いられると記述されている。現代熊本市方言では形容詞連体形接辞が-ka となるため，タ形も形容詞も共に/a/で終わることになるが，現代熊本市方言の観察では，/a/の後ろでも「ト」は現れ（(19)（21)），形容詞の場合は i 形容詞でも ka 形容詞と同様の分布となる。やはりここでも「ツ」と「ト」の使い分けは，文法的要因によるものとして整理するのが穏当のように思われる。

3.3.　まとめ

3 節でみた「ツ」と「ト」の関係をまとめると，次のようになる。

8）「??（不自然：適格性が極めて低い)」の判断について
九州大部分の地域では，準体助詞を使い分けることはなく（注 2 参照），福岡方言をはじめ，準体助詞として「ト」を用いる地域では，この文脈も当然「ト」が用いられる。このため，（20）（22）において「ト」が用いられても一応許容することはできるが，自分で使うときには「ト」よりも「ツ」を用いるという判断である。

表１ 直前語と「ツ」と「ト」の関係

	ツ	ト
動詞連体形	×	○
タ形・形容詞	○	○

大野（1983）では，「ツ」「ト」は音韻的に相補分布すると分析されたが，現代熊本市方言を分析する上では，直前音素との対応関係を「ツ」と「ト」の分布に結びつける根拠が希薄である。よって現代熊本市方言では，「ツ」と「ト」は動詞連体形／タ形・形容詞という文法的要因によって分布するものと整理し，さらにこの分布は相補分布ではなく，動詞連体形に後接する場合のみ「ツ」が用いられないものと捉える。

一方，タ形と形容詞の直後に準体助詞が付く環境においては，「ツ」と「ト」が用いられ，ここに二者の使い分けが生じるようである。

次節にて，後者の環境における「ツ」と「ト」の使い分けを記述する。

4. 意味面

本節では，3.2 節に示したような「ツ」と「ト」の両方が用いられうる環境において，どのように二者が使い分けられるのかを観察する。ここでは特に，「ツ」と「ト」の違いが顕著に現れる例を提示する目的から，準体句が主文述語の項に立つ場合を中心に扱う。

4.1. 《モノ・ヒト》／《コトガラ》

「ツ」と「ト」が両方用いられうる環境（3.2）においては，二者は意味解釈の面で対立する場合があるようである。例えば，その違いは次のようなミニマルペアに顕著である。

（23）a. ロウソクん[9] 消えたツば見た。

b. ロウソクん消えたトば見た。

一見同じように見える二つの文であるが，（23）a は「ロウソクの消えたのを見た。(=ロウソクを見た)」という《モノ》の意，（23）b は「ロウソクが消えたのを見た（=消えた場面，瞬間を見た)」という《コトガラ》の意で解釈される。

また次の（24）では，「ツ」を用いた a の準体句は人の意で解釈され，「ト」を用いた b

9） 現代熊本市方言では，「の／（ん)」と「が」を共に，主格助詞・属格助詞として用いる。

（主格例）

ア）［雨が降っている。］

雨の（／ん）降りよる。

イ）［福岡には太郎が行ったし，鹿児島には次郎が行ったよ。］

福岡には太郎が行ったし，鹿児島には次郎が行ったばい。

（属格例）

ウ）［先生の本。］

先生の（／ん）本。

エ）［俺の本。］

俺が本。（属格で「が」を使うのは，高齢層のみ）

の準体句は場面の意で解釈される。

（24）a. スーパーで万引きしとったツば見かけた。

b. スーパーで万引きしとったトば見かけた。

（24）a は「万引きをしていた奴を見かけた」，（24）b は，「万引きをしていた場面を見かけた」という意味で解釈される。

また，形容詞の場合も同様に，「ツ」を用いると《モノ・ヒト》解釈，「ト」を用いると《コトガラ》解釈となる。

（25）a. 男ん弱かツが許せん。

b. 男ん弱かトが許せん。

（25）a は「弱い男が許せない」の意で解釈され，一方，（25）b は「男が弱いということが許せない」の意で解釈される。

「ツ」も「ト」も用いうる環境下では，「ツ」を用いた準体句は《モノ・ヒト》解釈，「ト」を用いた準体句は《コトガラ》解釈，という対立が生じる。このように，《モノ・ヒト》／《コトガラ》で対立するとみられる点は，吉村氏・仁科氏の指摘とも重なるようである。

ただし次節に述べるように，「ツ」自体が《モノ・ヒト》の意味を，「ト」自体が《コトガラ》の意味を，それぞれが持っているわけではないと思われ，留意が必要と思われる。

4.2.　留意点―名詞＋属格助詞＋準体助詞の場合―

当方言の準体助詞「ツ」と「ト」は，前節のように用言に後接する場合だけでなく，属格「ノ／（ン）」句にも後接する。これは「～のもの」という意味になるのであるが，当方言ではここで「ト」も用いることができる。このことから，「ト」自体が《コトガラ》の意味を持っているわけではないことがわかる。

（26）［（これ誰の？）それは私の。］

a. それは私ノツ。

b. それは私ントト。

（27）［（これ何のねじ？）それは机の。］

a. それは机ノツ。

b. それは机ントト。

そもそも，機能語である準体助詞自体に意味を見出す考えは適当ではない。「ツ」と「ト」の違いについては，意味解釈だけでなく，また別の方向から捉える必要がありそうである。

次節では試みとして，従来あまり検討がなされなかった統語的側面から，「ツ」と「ト」の違いを記述したい。

5.　統語面

本節では，「ツ」と「ト」の統語環境の整理を行ない，それに基づく二者の相違点を示す。本節の比較を通し，主に次の二点を述べる。

・「ツ」も「ト」も，名詞とは性質が大きく異なり，あくまで助詞である。

・統語的にみて，「ツ」は「ト」よりも，名詞に近い性質を持つ（名詞性が高い）。

まずは，先に本節をまとめたものを次ページの表 2 に示しておく。

なお，表 2「参考 2 名詞」は，典型的な物名詞や人名詞で言い換えられるか，また作用性（ことがら）の場合は名詞「事」で言い換えられるか，という大まかな範囲で判定している。

表 2 を見るとまず，項目の 1 と 2 を除けば「ツ」の可／不可が，名詞のそれと重なっている点が注目される。また「ト」については，名詞では不可能な範囲（13 下，14 下，17~19）にも用いることができ，標準語「の」が用言句／節を体言化する範囲（13~17）をほぼ覆っていることが注目される。これら複数の点で「ツ」と「ト」には違いが出るようである。

5.1 節以下は，記述と用例を示していく。用例は，順に熊本市方言の準体助詞「ツ」の例，熊本市方言の準体助詞「ト」の例を挙げ，さらに参考として，標準語の準体助詞「の」や，典型的な名詞の例を挙げる。

また，本節では便宜上，《モノ・ヒト》を表す意の場合を「形状性」，《コトガラ》を表す意の場合を「作用性」とよぶことがある。

表 2　「ツ」と「ト」の統語的振舞い

○:可／△:条件付き／×:不可

統語環境		例	熊本方言		参考1 現代標準語	参考2 名詞
			「ツ」	「ト」	「ノ」	
1	単独で文となる	「**の**。」	×	×	×	○
2	単独で名詞句の主要部となる	「**の**がある。」	×	×	×	○
3	体言に後接して連体修飾となる	「太郎**の**本。」	×	×	○	×
4	体言に後接して名詞述語となる	「これは太郎**の**だよ。」	×	×	○	×
5	体言に後接して，直後に格を伴い主文述語の項となる	「僕**の**がある。」	×	×	○	×
6	体言に後接して直後に属格を伴う	「僕**の**の半分をあげるよ。」	×	×	○	×
7	属格句（所有）を受けて，名詞述語となる	「これは太郎の**の**だよ。」	○	○	×※1	○
8	属格句（所有）を受けて，主文述語の項となる	「太郎の**の**を取って。」	○	○	×※2	○
9	属格句（所有）を受けて，直後に属格を伴い体言を修飾する	「僕の**の**の半分をあげるよ」	○	○	×	○
10	属格句（所有以外）を受けて，名詞述語となる	「太郎の手拭は，その左隣の**の**だよ。」	○	○	×	○
11	属格句（所有以外）を受けて，主文述語の項となる	「その左隣の**の**を取って。」	○	○	×	○
12	属格句（所有以外）を受けて，直後に属格を伴い体言を修飾する	「三段目の**の**の一番端にあるのを取って。」	○	○	×	○
13	用言（連体形）を受けて，直後に格を伴い主文述語の項となる	意味：形状性 「魚の焼いた**の**を食べよう。」	△	(△)	○	○
		意味：作用性 「何回も雷が落ちた**の**を見た。」	×	○	○	×
14	用言（連体形）を受けて，分裂文の前項となる	意味：形状性 「太郎が釣った**の**は海老だよ。」	△	○	○	○
		意味：作用性 「泣いた**の**は悔しかったからだ。」	×	○	○	×
15	用言（連体形）を受けて，直後に属格を伴う	「踊っていた**の**の半分は子供だ。」	△	○	○	○
16	用言（連体形）の修飾を受けて，名詞述語となる	「それは太郎が作った**の**だよ。」	△	(△)	○	○
17	用言（連体形）を受けて，コピュラ（ノダ文）を構成する	「それは太郎が作った**ん**だよ。」	×	○	○	×
18	用言（連体形）を受けて，疑問文の終助詞となる	「誰が作った**の**？。」	×※3	○	○	×
19	用言（連体形）を受けて，直後に接続助詞を伴い，条件節を構成する	「春が来た**の**に，暖かくならない。」	×	○	○	×

※1:歴史文献には用例が存在する。 ※2歴史文献には用例が存在する。

※3:「ツ」を用いた場合,《モノ・ヒト》の意味が出るため，終助詞として認定するのは慎重を要する。Ex) あれは誰が作ったツ？（あれは誰が作ったもの？）

5.1.　自立性

まず,「ツ」も「ト」も，単独で文になることができず（表 2‐1，例（28)），また，単独で名詞句の主要部になることもできない（表 2‐2，例（29)）。

（28）（「これは何？」の問いに対して,）

a. *ツ。

b. *ト。

c. *の。

d. 本。

（29）a. *ツがある。

b. *トがある。

c. *のがある。

d. 本がある。

吉村・仁科 （2001）では,「もの」や「やつ」に置き換えられる性質を持つ準体助詞「ツ」を,「名詞（代名詞・形式名詞)」として記述している（p.71)。しかし，本節（28）（29）に示したように,「ツ」も「ト」も共に自立性を持たず，名詞とは統語的性質が大きく異なる。この点において,「ツ」と「ト」はあくまでも助詞であると言える。

5.2.　属格（連体修飾）機能／準体機能

次に,「ツ」と「ト」は共に，現代標準語「の」のように体言の後ろに直接付いて属格として振舞うということはできない（表 2-3)。現代標準語の「の」は，属格（連体修飾）機能と体言化機能を合わせ持つが,「ツ」と「ト」は連体修飾機能を持たないといえる。

（30）体言に後接して，体言を修飾する（表 2-3）

a. *太郎ツ本。

b. *太郎ト本。

c. 太郎の本。（現代標準語）

また,「これは太郎の。」「ここに太郎のがある。」のように，後ろに体言を伴わずに「～のもの」を表す体言相当句を構成する場合も,「ツ」や「ト」は体言に直接付かない（表 2-4~6)。

（31）体言に後接して主文の述語（名詞述語）となる（表 2-4）

a. *これは太郎ツばい。

b. *これは太郎トばい。

c. これは太郎のだよ。（現代標準語）

（32）体言に後接して主文述語の項となる（表 2-5）

a. *僕ツがある。

b. *僕トがある。

c. 僕のがある。（現代標準語）

（33）体言に後接して直後に属格を伴う（表 2-6）

a. *僕ツの半分ばやるばい。

b. *僕ト の半分ばやるばい。

c. 僕の の半分をあげるよ。（現代標準語）

5.3.　体言＋属格＋準体助詞（属格名詞句を受けて「～のもの」を表す用法）

前節のような「～のもの」を表す体言相当句を構成する場合は，現代熊本市方言では，体言＋属格「ノ（／ン）」＋準体助詞「ツ／ト」となる。

（以下，現代標準語の「の」と，熊本市方言の連体修飾専用[10]の助詞「ノ／（ン）」を区別するため，熊本市方言の方をカタカナで表記する。）

この構文における「ツ」と「ト」の相違については，音韻的に「ト」に前接する属格（連体修飾格）が/n/になるという違いはあるものの，「ツ」と「ト」で生起環境に偏りがあるわけでもなく，意味の違いもない。

（34）（属格句を受けて主文の述語（名詞述語）となる）《所有の意》（表 2-7）

a. これは花子ノツだよ。

b. これは花子ントだよ。

c. *これは花子ののだよ。（現代標準語）

（35）（属格句を受けて主文述語の項となる）《所有の意》（表 2-8）

a. 太郎ノツば取って。

b. 太郎ントば取って。

c. *太郎ののを取って。（現代標準語）

（36）（属格句を受けて主文の述語（名詞述語）となる）《所有以外の意》（表 2-10）

（「太郎の手袋はどっち？」という問いに対して，）

a. その左ノツばい。

b. その左ントばい。

10）　現代熊本市方言の属格（連体修飾格）は，「ツ」「ト」ではなく「ノ（／ン）」である。この「ノ（／ン）」は標準語「の」とは異なり，（34）～（37）のような文において，「ノ（／ン）」だけを用いるというのは，方言形としては不自然のようである（以下の b~d）。これは，「ノ／（ン）」が体言化機能を持っておらず，「ノ／（ン）」を伴った句だけでは体言相当になることができないためと考えられる。現代熊本市方言の「ノ／（ン）」は，連体修飾専用の助詞であると分析する。

例）　熊本市方言の「ノ」（例文は（30）～（33）に対応）

（30）’太郎ノ本。

（31）’*これは太郎ノばい。

（32）’*僕ノがある。

（33）’*僕ノノ半分ばやる。

熊本市方言において所有等をあらわす場合は，本文に示したように，「ノ（／ン）」の後ろに「ツ」または「ト」伴うのが自然である。熊本市方言では，標準語の「の」が合わせ持つ属格機能と準体機能の 2 つの働きを，「ノ」と，「ツ」「ト」で分担しているものと考えられる。

（31）～（33）の言い換え

（31）”これは太郎ノツばい。
　　これは太郎ントばい。

（32）”僕ノツがある。
　　僕ントがある。

（33）”僕ノツノ半分ばやる。
　　僕ントノ半分ばやる。

c. *その左のだよ（現代標準語）

（37）（属格句を受けて主文述語の項となる）《所有以外の意》（表 2-11）

a. その左隣ノツば取って。

b. その左隣ントば取って。

c. *その左隣のを取って。（現代標準語）

また，属格句を受けて，直後に属格を伴い，体言を修飾することも可能である。

（38）（属格句を受けて属格を伴い体言を修飾）（属格句が《所有の意》）（表 2-9）

a. 僕ントノ半分ばやるばい。

b. 僕ノツノ半分ばやるばい。

c. *僕ののの半分をあげるよ。（現代標準語）

（39）（属格句を受けて属格を伴い体言を修飾）（属格句《所有以外の意》）（表 2-12）

a. 三段目ントノ一番端にあっとばとって。

b. 三段目ノツノ一番端にあっとばとって。

c. *三段目ののの一番端にあるのを取って。（現代標準語）

「～のもの」を表す体言相当句をつくる際に，「体言＋属格＋準体助詞」という構成になるという点においては，現代標準語の「の」とは異なる[11)]。しかし体言相当句を構成するという機能面においては，「ツ」も「ト」も標準語「の」も，同様といえる。

また，この「体言＋属格＋準体助詞」の体言相当句を構成する際，「ツ」と「ト」の使用には違いがあらわれない。この点からは，「ツ」と「ト」がそれぞれに《モノ・ヒト》か《コトガラ》かの特定の意味（指示対象）を持っているとは考えにくい。

5.1~5.3 までを箇条書きでまとめる。

・「ツ」と「ト」は助詞（機能語）である。

・「ツ」と「ト」は体言化機能のみを持つ。

・「体言＋属格＋準体助詞」で「～のもの」をあらわす際，「ツ」と「ト」に違いはない。この点からは，「ツ」と「ト」が《モノ・ヒト》か《コトガラ》かの特定の意味（指示

11） 現代標準語では，上記のような「の＋の」が許容されないため，属格助詞の直後に準体助詞が付くというのは一見特殊のように思われる。しかし通時的に見れば，東京方言に連なる江戸語においても属格助詞に準体助詞が連なる例は存在し（「がの」（1）（2）），また共時的に見ても，属格の直後に準体助詞が付いて「～のもの」をあらわす例が複数の方言にみられる。現代熊本市方言の「ノツ」「ント」はそれらと同じ構造であり，通時的・共時的観点からすれば，むしろ特殊ではない。

a. 息子がの は。何とか言つた

（『南閨雑話』［近世中期江戸語資料］洒落本大成編集委員会 （1979）『洒落本大成 6』中央公論社）

b. 此つゝみはおいらがのだ

（『東海道中膝栗毛』［近世後期江戸語資料］麻生磯次校注（1958）『日本古典文学大系 62』岩波書店）

c. コイナバ　オレガナダ（秋田県河辺郡，大野（1983））

d. オラノガジャ（高知県土佐郡土佐町，大野（1983））

e. 太郎ノソジャラ（福岡県京都郡犀川町，大野（1983））

f. あん子がとやいどー（鹿児島県甑島里町，筆者調べ（2011 年調査，80 代男性））

対象）を持っているとは考えにくい。

5.4.　用言に後接する場合

5.4.1.　主文述語の項になる場合

用言に後接して主文述語の項になる場合は，4 節までに示した通りである。

表 2-13 の「△」と「(△)」については，3 節の条件（タ形・形容詞に後接する場合には「ツ」が積極的に選ばれるが，動詞連体形に後接する場合は「ト」が用いられるという条件）が伴うことを示す。用例は 3 節 4 節に挙げたため，ここでは省略する。

分布から言えることは，準体句が作用性である場合は「ツ」が用いられないということである。「ツ」を用いると，作用性ではなく，具体物を指しあらわす文としての解釈が導かれ，極端な例としては（40）のように，「ツ」を用いると全く意味の通らない解釈となる。

（40）［幽霊が消えたのを見たことがあるんだよ。］

a.　幽霊ん消えた<u>ト</u>ば見たこつんあっとよ。

b.*幽霊ん消えた<u>ツ</u>ば見たこつんあっとよ。

（「ツ」を用いると，「消えてしまった幽霊を見た」（消えて見えなくなったはずのものを見た）という解釈に導かれる。）

5.4.2.　分裂文の前項となる場合

次に，用言に後接して分裂文の前項になる場合であるが，この場合，5.4.1 にみた「ツ」と「ト」の分布とは，やや異なった分布がみられる。

先に 5.4.1 と共通する部分から述べると，動詞連体形に後接する場合に「ト」しか許容されない点は同じである。

（41）［太郎が持っているのはミカンだよ。］（動詞連体形に後接）

太郎が持っとっ｛*ツ／ト｝とはミカンばい。

そして，作用性（コトガラ）をあらわす分裂文の場合において，「ツ」が許容されず「ト」のみが用いられるという点も，5.4.1 の場合と同じである（表 2-14 下段）。

（42）［泣いた<u>の</u>は悲しかったからだ。］

泣いた｛*ツ／ト｝は悲しかったけんばい。

しかし，タ形・形容詞に後接する環境で，且つ形状性をあらわす場合，5.4.1 とは異なる振舞いがみられる。5.4.1 からすると，形状性をあらわす場合は「ツ」が選択されると予測されるところ，分裂文では「ツ」を用いても「ト」を用いても同じである（表 2-14 上段）。

（43）［太郎が釣った<u>の</u>は海老だよ。］（タ形に後接）

太郎が釣った｛ツ／ト｝は海老ばい。

このように，形状性をあらわす分裂文に，「ツ」と「ト」の両方が用いられるという現象は，吉村（2001），吉村・仁科（2004）にも指摘され注目されている。

しかし，形状性であっても「ツ」と「ト」の両方が用いられるというのは，5.3 のような体言＋属格＋準体助詞の場合にも見られれば，次節 5.4.3 のように，属格を後ろに伴って体言を修飾する場合にもみられる。考察は 5.4.4 に改めておこなう。

5.4.3　属格を伴って体言を修飾となる場合

用言を受けて直後に属格を伴う場合も，意味に関わらず「ツ」と「ト」の両方が用いられる（表 2-15）。

（44）［さっき踊っていたのの半分は子供だったんだよ。］
　　踊っとった｛ツ／ト｝の半分は子供だったとばい。

5.4.4　5.4 節のまとめと考察　―二つの準体助詞の名詞性（指示性）―

吉村氏・仁科氏の一連の研究では，「「もの」（名詞）を意味する「の」は「つ」に，一方，「こと」（節）を意味する「の」は「と」に，それぞれ対応している」（吉村・仁科 2004:65）という前提のもと，形状性の分裂文で「ツ」と「ト」の区別がなされないことが注目されてきた。

しかし現代熊本市方言の観察から「ツ」と「ト」の出現環境を全体的にみると，むしろ，なぜ主文述語の項となる準体句では「ツ」と「ト」の区別が活きるのか，そして，なぜ（40）（42）のような場合には，主文述語の項であるにせよ分裂文の前項であるにせよ「ツ」が用いられないのか，という方が注目されるように思われる。

これらついて，現時点では，（40）の観察で述べたような「ツ」の名詞性（指示性）の高さが関わるものと考える。（40）にみたように，「ツ」を用いた場合は具体的な存在を指し示す文脈として解釈が導かれ，「ツ」は具体的事物を指しあらわす機能を強く帯びていると考えられる。現代熊本市方言は，より指示的な準体助詞と，より機能的に振舞う準体助詞の二種類を持つといえる。

そこで，5.3 の「～のもの」をあらわす構文，（43）の形状性分裂文，（44）の属格を伴った構文をみると，これらは構文的に《モノ・ヒト》であることが指定される。そのためこれらの構文では，極端にいえば，体言化さえできれば対象を限定する度合いは関係なく，準体助詞を区別する必要のない環境であると考えられる。

一方，準体句が主文述語の項になる場合，その準体句が《モノ・ヒト》を指すものであるか否かを決定づけるものは，主文の末尾にくる述語の用言であり，かつ，その用言によっては 4.1 にみたように，それだけでは区別できない場合もある。これらは先の 5.3 等の場合に比して，構文が形状性か作用性かを指定する力は弱い。よって具体的存在を指しあらわす機能に違いのある 2 つの準体助詞を持つ当方言では，その違いが活きるものと考える。

また，（40）（42）で「ツ」が用いられない点も，「ツ」の名詞性が関わるものと考えられる。（40）（42）の作用性をあらわす文は，両者ともに，名詞「事」で置き換えることができない。このため，名詞性の高い「ツ」は用いることができないのではないかと考える。

（45）*消えたことを見た。

（46）*泣いたことは悲しかったからだ。

名詞を用いることができない環境において「ツ」を用いる事ができず，かわりに「ト」によって体言化がなされるという傾向は，次節に示すようなノダ文，疑問の終助詞，接続助詞の場合に特に顕著であり，ここまでの考察を補強するものである。

5.5.　コピュラ（ノダ）・疑問の終助詞（ノカ）・接続助詞（ノニ）

5.5.1.　コピュラ

主文述語の位置に立ってコピュラになる，いわゆるノダ文を構成する場合は，「ト」が用いられる（(47)）。ここで「ツ」を用いると，その文は事物を具体的に指しあらわす意味解釈となるため，ノダ文とはならない（(48)）。

（47）（ノダ文）［これは太郎が作ったんだよ。］（表 2-17）
これは太郎が作った｛*ツ／ト｝ばい。

（48）cf. これは太郎が作ったツばい。
（→「これは太郎が作ったの（=もの）だよ。」の意となる）（表 2-16）

5.5.2.　疑問の終助詞

用言を受けて，疑問の終助詞となる場合，「ト」が用いられる（(49)（51)）（表 2-18)。「ツ」を用いた場合，「誰が作ったもの？」「誰が言ったこと？」として事物を指示する解釈となり，終助詞の解釈にはならない（(50)（52)）。

（49）［これ誰が作ったの？］
これ誰が作った｛*ツ／ト｝？

（50）cf. これ誰が作ったツ？
（→「これ誰が作ったの(=物)？」の意となる。）

（51）［誰が言ったの?］
誰が言った｛*ツ／ト｝？

（52）cf. 誰が言ったツ？
（→「だれが言った話？」の意となる。）

5.5.3.　接続助詞

用言を受けて，条件節を構成する場合，「ツ」は用いられず，「ト」が用いられる。（表 2-19）

（53）［春が来たのに暖かくならないね］
春ん来た｛*ツ／ト｝に，暖かくならんね。

5.5.4.　5.5 節のまとめと考察

（47）～（52）では「ト」しか用いられず，これを「ツ」に変えた場合は具体物を指す解釈に切り替わる点が注目される。また全体的に，名詞を用いることができない環境では「ツ」も用いられない，という点も注目される。ここまでの観察を通し，「ツ」は統語的に名詞に近い振舞をすること，また，具体物を指示する性質を比較的強く持つということが指摘できる。一方「ト」は，名詞を用いることができない範囲もカバーした機能的な体言化を担っていることが指摘できる。

そして 5.4.4 にも述べたように，このような二者の性質の違いが，特に主文述語の項とな

る場合にみられる「ツ」と「ト」の振舞の違い，すなわち，準体句の性質と「ツ」と「ト」の対応に繋がったものと考える。つまり指示する度合いの違いから，より具体的に《モノ・ヒト》を指しあらわす形状性の準体句では「ツ」，一方，句節全体で体言相当となるが具体物を指示しない作用性の準体句では「ト」が用いられるという対応が生じたと考えられ，またその結果，吉村・仁科氏の観察のように，「ツ」＝《モノ・ヒト》，「ト」＝《コトガラ》のように，意味を持たない機能語である準体助詞が意味を持って住み分けているように感じられたのではないかと考えられる。

6. まとめと課題

本論では，次のことを述べた。

形態音韻面

・直前の用言が動詞連体形の場合，「ツ」は用いられない。

・直前がタ形・形容詞の場合は「ツ」「ト」両者が現れうる。

意味面

・「ツ」と「ト」が両方現れうる，すなわち二者が対立しうる環境においては，「ツ」と「ト」では意味解釈に違いが生じる。この際，「ツ」を用いた準体句は形状性（モノ・ヒト），「ト」を用いた準体句は作用性（コトガラ）の解釈となる。

・しかし，機能語である「ツ」と「ト」自体に意味があるわけではない。

統語面

・「ツ」と「ト」では，統語的には「ツ」の方が名詞と似た振舞をする。一方「ト」は，名詞に置きかえられない「～ノダ」「～ノニ」等にも用いることができ，より機能的に振舞う。

・「ツ」＝《モノ・ヒト》と「ト」＝《コトガラ》という分布は，具体物を指しあらわすか否かという名詞性（指示性）の違いで捉えられる。このことで，コピュラや終助詞等における「ツ」と「ト」の違いも説明できる。

以上，熊本市方言の準体助詞「ツ」と「ト」について，記述・分析・考察を試みた。

本論の大きな課題としては，なぜ動詞連体形に後接する場合に「ツ」が用いられないのか，という説明課題が残っている。

今後は熊本市の他地域との対照や，高齢層への調査や世代差の対照を進める等して，「ツ」使用の可不可を詳細に検討したい。

【参考文献】

秋山正次（1961）「熊本」『方言学講座』第四巻，pp.208-238，東京堂

大野早百合（1983）「現代方言における連体格助詞と準体助詞（その一）」『大阪大学日本学報』2，pp.27-66，大阪大学文学部日本学研究室

仁科明・吉村紀子（2005）「補文標識の出現―『の』の歴史的変化―」『国際関係・比較文化研究』3-2，pp.267-281，静岡県立大学

吉村紀子（2001）「分裂文を八代方言からさぐる」『ことばと文化』4，pp.67-84，静岡県立大学

――――（2006）「熊本八代方言から日本語を見る：主格の「が」・「の」をめぐって」*Scientific*

Approaches to Language 5: Main Clause Phenomena in Japanese and Syntactic Theory. pp.195-211，神田外語大学言語科学研究センター
————・仁科明（2004）「分裂文の意味と構造―古代日本語と九州方言の接点―」『ことばと文化』7，pp.55-72，静岡県立大学

さかい　みか（大阪大学大学院生）
mika.sakai.0923@gmail.com